

母子間相互作用についての発達心理学的アプローチ：
母親による子どもの心の想像と子どもの社会的発達

篠原郁子 （愛知淑徳大学）

要旨

子どもの社会情緒的発達は、個体の成熟のみならず、社会的環境との相互作用の中で漸次的に進行すると考えられる。本稿では、生後間もなくから存在する社会的環境として親子関係、特に母子関係を取り上げる。一人一人の母親は、乳児をどのような存在だと感じながら、乳児を育てているのだろうか。本稿は主にVygotzkyの理論やアタッチメント理論に依拠しながら、母親が乳児を豊かな感情、思考、欲求を持った一人の人間であると見なすという、母親の主観的見解に注目する。母親のこうした主観が子どもへの具体的養育行動、さらには、子どもの社会的発達に及ぼす影響について、筆者による縦断研究の結果を紹介しながら考察する。最後に、発達早期における親子関係が持つ重要性と、親子関係を研究する際に留意したい視点について議論する。

1. 乳児に対する成人の知覚的反応と行動

乳児と大人のやりとりを観察すると、大人が独特の興味深い行動を表出する様子に気づく。乳児に対して、多くの大人は高い声で、ゆっくりと、大きく抑揚をつけた話し方をする。赤ちゃんに向けた話し方は、マザリーズ、あるいはIDS(infant directed speech)などと呼ばれている[13, 28]。話し方だけでなく、動き方も変化する。乳児と遊ぶとき、大人はおもちゃを大きくゆっくりと、何度も繰り返して動きを見せたりする。乳児に向けて修正された行動は、モーショニーズやinfant directed actionと称される[7]。乳児とやりとりをする大人について、他にも注目すべき点がある。そもそも乳児の顔は、大人の顔よりも、私たちの視覚的注意を惹きつけやすい[8, 51]。そして、乳児顔を見た大人は、それをかわいいと感じ、触りたい、抱っこしたいといった気持ちを持つようである[18, 37]。もう一つ、乳児を見た大人が示す独特の反応として旧来報告されているのが、乳児の行為に対して意味や意図を与えてしまうという点である[2, 4, 41]。例えば、乳児が黒めがちな瞳を床に落とすと「おもちゃを取ってほしいの？」と父親が話しかけたり、乳児が足をばたばたと動かすと「早くお出かけしたいのね」と言いながら母親が抱き上げたりする、といったことがある。乳児の視線や動作が、現実にどこまで乳児自身の欲求や感情や期待を伴い、さらにはそれらを伝達する意図を伴っているのかという実際の発達状態には関わらず、大人、特に養育者は乳児の行為を意味のある、意図的なものと解釈するようだ [1, 10]。

2. 乳児に意味を与えることの意味

養育者が乳児を時に実際以上に、意図的な行為者、心的行為者と見なす傾向について早くから描写を行ってきたKaye[23]は、養育者による豊かな心の読み込みと、実際の乳児の発達状態とのギャップを指して、次のように述べている。多くの養育者は「騙されて」乳児をやりとりのパートナーとして扱っているのであり、このことは「心理学の企業秘密にしておくべきだ」と。このウィットに富む表現を用いて少し加言するならば、乳児側にも大人を騙してしまうような特徴が備わっている。乳児は生後すぐに、顔という社会的刺激を敏感に見つめたり[19]、微笑を浮かべたり[11]、他児が泣くと一緒に泣く様子さえも見せる[42]。その微笑が筋収縮の結果であり[11]、他児への応答的泣きが共鳴動作と呼ばれる単純な形としての同期であったとしても[22]、これらを見る大人は、乳児が楽しさや悲しみを感じ、他者の気持ちに共感していると感じてしまうだろう。また、乳児の様々な表情は、実際には2歳後半以降に見られる恥ずかしさ等の自己意識的情動[27]を感じさせるのに

十分かもしれない。乳児には生後間もなくから心の交流を感じさせる行動的特徴が備わっており、その特徴に養育者の心が感応しながら、親子のやりとりが生起していくのだと考えられる。

養育者が乳児を大人と同じように心的世界を持った一人の人間として扱うことの意味について、Adamson[1]はVedelaer[52]を引用しながら as-if構造に基づく乳児の社会化という視点で説明している。大人の主観的解釈によって乳児をあたかも(as-if)心を備えた存在であるかのように扱うことは、第一に、早期から乳児と社会的やりとりを構築することに貢献する。第二に、そうして築かれるやりとりは、乳児が実際に心的行為者となる発達を支える足場を提供していると考えられている。この視点は、Vygotskyの社会文化的アプローチに共鳴する。Vygotsky[53]は、発達は二度起こり、まずは他者との間「精神間」で、次に、子ども個人「精神内」に起こるといふ。発達早期に養育者が「乳児が心を持つ」と解釈して関わることによって、乳児は、心の世界についての理解や振る舞いを内在化し、真に心的行為者として発達していくという可能性が考えられている。

こうした理論的示唆に対して、近年、アタッチメントの研究領域から興味深い報告が続いている。次節では、研究知見を紹介していこう。

3. アタッチメント研究からの示唆

アタッチメントとは、子どもが不安や不快を感じた際に、養育者など特定の対象への近接を介して安心感の回復・維持することを指し、こうした経験に基づいて養育者との間に築く情緒的絆を意味する[6]。アタッチメントは発達早期に形成され、生涯に亘り心身の健康を支える機能を持つと考えられている。そして、個々の子どもが養育者に対して持つアタッチメントには個人差があるとする報告の後[3]、その個人差と他の発達との関連を問う研究が多く実施されてきた。特に注目されるのが、安定型アタッチメントを持つ子どもは他者の感情理解、誤信念理解等の社会的発達に優れるという知見である[16, 21, 25, 32, 49]。そして現在、安定型アタッチメントの子どもの養育者は、子どもの意図、感情、信念や動機に目を向けて子どもを心的行為者として捉えており、こうした姿勢が子どものメンタライジングの発達を促進しているのではないかと考えられている[14, 43]。

例えば、Fonagy とTarget[15] は、養育者が自他の内的な過程について思考する内省的な姿勢に着目し、これを内省機能(Reflective Function)と呼ぶ。生後12ヵ月時に測定された母親の内省機能の特徴は、他者の心の理解能力の一つだと考えられている[20, 26, 38]

子どものふり遊びの能力を予測した[17]。これは、養育者による子どもの心的状態についての内省が、子どもの発達を促すことを示唆するものとして注目されよう。

さらにMeins[30]は養育者が子どもの行動の背景にある心(mind)について目を向けてしまう(minded)傾向に着目し、これをmind-mindedness(以下MM)と呼んでいる。そして、生後6ヵ月時に母子相互作用を観察し、母親のMMとして、「乳児の心的状態を適切に読みとって発話する程度」を測定した[31]。この指標は、子どもが4・5歳になった時の心の理論獲得を予測することが縦断研究により報告されている[33, 34]。他にもOppenheimらは、養育者が子どもの行動を感情や思考といった動機に基づいて理解しようとする傾向に着目し、これをInsightfulness(洞察性)と名付けた[35]。そして、子どもが1歳時に、母親が子どもの心的状態の存在を肯定的に認め、バランスのとれた洞察性を持っていることが、4歳時の子どもの誤信念理解の発達に寄与することを見出しているのである[36]。

4. 「心理学の企業秘密」への小さな問い

このように現在、養育者が子どもの心的状態に目を向けるという特徴自体が、子どものメンタライジング能力の発達に与える直接的影響が複数報告されている。特にMeinsら[33, 34]やOppenheimら[36]による縦断的研究は、発達早期に養育者が子どもの心的世界についてどのような見解を持っているかが、後の子どもの発達に長期的な影響を持つことを示唆する重要な知見である。ただし、元来、アタッチメントの安定性に関連づけた検討が行われてきたために、これらの研究では、養育者が乳児の心を想定する際の、内容としての適切さ、正確で受容的な読み取りという側面が中核的要素として検討されてきた。しかしながら、Kaye[23]あるいはAdamson[1]が指摘したように、養育者が乳児を心的行為者であるとみなすこと自体が、子どもの発達に貢献するのかはこれまで直接的に検討されていない。(内容の適切性は問わずに)養育者が乳児の行為に対して心的状態を伴うとrichに解釈すること自体が、子どものメンタライジング能力の促進因になっている可能性を検討することも興味深いテーマであろう。乳児の行為とそれに対する養育者の解釈について、Kaye[23]によると両者の間に潜在的に存在するギャップは「心理学の企業秘密」であるらしいが、以下では、そのギャップが子どもの発達にとって持つ意味を検討するという、筆者の小さな試みを紹介したい。

上記の議論を踏まえて、筆者はまず、「乳児を心を持った一人の人間とみなす傾向」として提唱されたMeins[30]のmind-mindedness概念に注目した。そして、乳児に帰属する

心的状態の内容に関する適切性[31]は扱わず、そもそもどれほど豊かに心的状態の想定を行うかという量的豊富さに焦点化し、この特徴が子どもの発達に及ぼす影響を検討することとした。性質を区別するために、先述のMeinsら[31]によって測定されたものを「適切なMM」とし、筆者の研究で扱うものを「豊富なMM」と呼ぶことにする。以下、筆者の研究紹介においては後者を指してMMと表記することとした。

MMについて、具体的には以下の検討を行った。(1)乳児を育てている母親を対象とするMMの測定、(2)MMを持つ母親は、子どもとの実際の相互作用場面において、子どもに心の世界を絡めた養育行動を多く行うという仮説の検証、(3)MMは、子どものメンタライジング能力を発達早期から促進するという仮説の検証、の3点である。先行研究に則り生後6ヵ月時点で母親のMM測定を実施し、その後、子どもが48ヵ月に至るまでの縦断研究を実施した。篠原[45, 47, 48]に基づき、主な分析結果を順に示す。

5. 母親を対象とした豊かなMMの測定

Meinsら[31]は母親が持つ適切なMMを、実際の母子相互作用中の母親の行動を得点化することで測定している。しかしながら、母子相互作用場面における母親の行動は、子ども側の行動や気質といった特徴から大きく影響を受ける可能性がある。そこで子どもからの影響を統制し、母親自身が持つ特徴を測定するための方法を考案した。その際、Reznick[41]、Adamsonら[2]を参考に、共通の乳児ビデオ刺激セットに対する心的帰属の豊富さを問うことで、母親の個人的特性としてのMMを測定することが可能ではないかと考えた。なお、Meinsら[31]は母子相互作用の観察に基づき、母親が乳児の意図、感情、思考、欲求、期待といった幅広い内容の心的状態に言及することを示している。そこで、共通の乳児刺激に対する幅広い内容の心的帰属のしやすさをとらえるため、母親が刺激に対して想起した具体的な内容を自由に話すという、口頭回答を求める形で豊富なMMの測定実験を計画した。

実験刺激の材料として、MM測定対象となる母親やその子どもとは別の、生後6～9ヵ月までの乳児8名(男女各4名)とその母親8組を対象に、各家庭で様々な日常生活場면을撮影した動画を使用した。なお、本実験でビデオ刺激に用いる乳児の月齢は、意図的なコミュニケーション行為を行うと考えられる生後9ヵ月以下とした。予備実験を経て選定された5つのビデオクリップ(各30秒)を本刺激として採用した。

生後6ヵ月児の母親38名を対象に、家庭訪問によって個別にMM測定実験を実施した。母

親の平均年齢は31.9歳（レンジ：20-41歳），乳児の月齢は平均6ヵ月20日（レンジ6ヵ月4日ー7ヵ月6日）であった。乳児の性別は男児と女児が各19名ずつ，第1子が22名，第2子以降が16名であった。上で作成した乳児刺激5つをPC上に呈示し，各刺激に対して「乳児はどんなことを思ったり，考えたり，感じたりしていると思いますか？」と質問した。内容が複数に亘ると思われる場合にはその全てを，また，特にこれといった心的状態を有していないと思われる場合には，その旨を回答するように事前に教示した。5つの乳児刺激に対する母親の回答から，乳児の心的状態に言及したものをカウントし，その合計数をMM得点とした。乳児の行動描写（例：手をたたいている）はカウント対象から除外した。心的状態とはBrown & Dunn[9]，松永・斉藤・荻野[29]を参考に，感情状態，要求，動機付け，意志などを含む欲求状態，思考や認知，眠気等の生理的知覚状態に該当するものであった。

MM得点(5つの乳児刺激に対する，心的状態への言及回数の合計)を算出したところ，平均は9.05点(SD:3.52)であった。母親たちは，刺激あたり平均2つ以上という，複数の心的状態を帰属する様相が示された。また，実験場面において，乳児の心的状態の言語化という回答が非常に素早く行われたことが印象的であった。母親達は全体として，乳児が何らかの，しかし具体的な心的状態を持つと想定するスタンスを有していることが窺えた。ただし一方で，MM得点のレンジは2回～20回であった。同一の乳児刺激を呈示したにも関わらず回答数にばらつきがあり，母親によってはビデオクリップ5つのうち，3つが「特に思ったり考えたりしていない」と感じられる内容であったことが示された。乳児への心的帰属には，乳児を育てる母親間においても個人差があることが示唆される。なお，MM得点には，研究協力者である母親自身の子どもの性別，出生順位による差異は認められなかった。MM得点にみられる個人差の規定因に関する検討は，別稿[44, 48]を参照されたい。

6. 母親のMMと子どもへの養育行動

次に，上で測定された母親のMMは，実際に我が子とふれ合う相互作用場面において，子どもに対する行動とどのように関連しているのを検討した。生後6ヵ月時にMM測定を行った母親とその子どもを対象として，縦断的に母子相互作用場面の観察を行った。観察は，生後6ヵ月時を初回とし，続けて生後9，18，24，36ヵ月の計5時点で家庭訪問により実施した。各時点における母子自由遊び10分間中で認められた母親の行動を分析対象とした。

第一に，高いMM得点を持つ母親は，乳児の視線に意図や欲求を帰属しやすいために，乳児と注意を共有したやりとりを行いやすいのではないかと考え，生後6ヵ月と9ヵ月の時

点で分析を実施した。5秒を1フレームとして母親の行動を、「子どもが見ている対象を見る注意追従行動」、「母親自身が見ている対象に子どもの注意を引く注意転換行動」、「子どもに積極的に関わらない傍観」というカテゴリーに分類した。高いMM得点を持つ母親は、傍観が少なく($r=-.54, p<.01$), 子どもに多く関わっていることが示された。また、高いMM得点を持つ母親には注意追従行動が多く($r=.57, p<.01$), 同時におもちゃなど第3項を交えた3項やりとりを多く行っていた($r=.49, p<.01$)。これらの関連が認められたのは生後6ヵ月時のみであったが、子ども側に共同注意能力が十分に発達すると考えられる以前から、高いMM得点を持つ母親は、子どもと注意を共有しながらやりとりをしていることが示された。

第二に、MMを持つ母親は、子どもの心的状態について多く発話するだろうという仮説に基づき、母親が子どもに関して心的語彙を用いた頻度について分析を行った。各時期の当該の発話頻度をTable1に示す。子どもの心について母親が発話した回数は、全5時点の観察場面に一貫して、MM得点と有意な相関を持つことが明らかとなった($r=.39\sim r=.47, p<.05, p<.01$)。つまり、高いMM得点を持つ母親は、乳児期から幼児期に亘って一貫して、子どもに多くの心的語彙を付与していた。この長期的な関連は特に注目すべき結果であると考えている。

7. 母親のMMと子どもの感情理解、語彙能力の発達

母親の豊富なMMが、子どものメンタライジング能力を発達早期から広く引き上げるだろうという仮説を検証するため、生後9, 18, 24, 36, 48ヵ月の計5時点で、子どもの能力を測定した。

まず、感情理解、心的語彙能力の発達と母親のMMとの関連について結果を示す。生後18ヵ月時(N=35)に、母親を対象に子どもが日常生活の中でどれほど心的語彙を使用、および理解しているかを問う質問紙調査を行った。生後6ヵ月時に測定された母親のMM得点は、生後18ヵ月時の感情語の理解得点($r=.40, p<.05$), 並びに、心的語彙全体の理解得点と正の相関関係にあることが認められた($r=.43, p<.05$) [46]。

生後48ヵ月時点における追跡調査では、直接子どもに実験課題を行った(N=31)。表情画やストーリーの登場人物の感情に対する理解度[39]を測定した。その結果、高いMM得点を持っていた母親の子どもは、48ヵ月時に、顔表情画に対するラベリング能力(うれしい顔、悲しい顔、など、表情を子どもが自分の言葉で説明する能力)が高いことが明らかとな

った($r_s=.42, p<.05$)。同時に、子どもの全般的な語彙能力について、日本語版絵画語彙テストPVTを実施し、子どもの語彙月齢を測定した。語彙月齢($M=49.90, SD=10.63$)は生活月齢とほぼ重なることが確認されたが、高いMM得点を持つ母親の子どもは、語彙月齢が高い($r_s=.49, p<.01$)ことが見出された[47]。

これらの結果について、母親のMM得点が、子どもへの養育行動を介して、子ども感情や語彙理解を促進しているのかという影響プロセスを検討するため、小サンプルながら構造方程式モデルを用いた分析を試みた[48]。媒介変数とする母親の養育行動には、母親のMMとの相関関係が認められた、生後6ヵ月時における乳児の注意追従型かかわりと3項やりとり、さらに、母親が子どもの心的状態に言及した頻度を用いた。母親の発話指標については、複数時点における情報を縮約するために主成分分析を行い、主成分得点を算出して分析に用いた。

モデルの分析結果に基づき修正を行い、最終的にFigure1と2に示したモデルを採用した。Figure 1より、母親のMM得点が、生後6～18ヵ月時における子どもの心的状態への言及を介して、18ヵ月時の感情語ならびに心的語彙全体に対する理解能力に寄与していることが示唆された。同様にFigure 2からは、48ヵ月時の表情ラベリング能力には、母親のMM得点が、乳幼児期全体を通して子どもの心的状態に言及する養育行動を介して、促進的影響を持つことが示唆された。また、MM得点は、生後6ヵ月時に子どもの注意を追従する関わりを通して、48ヵ月時の一般語彙能力に寄与することが示された。

8. 母親のMMと欲求・信念理解の発達

子どもの感情理解と語彙発達については、乳児に測定された母親のMMが、養育行動を介して子どもの発達を促進するという仮説を支持する結果が得られた。しかしこの縦断研究からは、もう一つ、研究開始時には全く予想をしていなかった結果が得られた[47, 48]。

生後36ヵ月時点では、他者の欲求を理解する能力についての実験を子どもに実施した($N=29$)。課題では、ピーマンとビスケットの玩具を用いて、実験者がピーマンを食べるふりをして笑顔で「おいしい」と話した後、ビスケットを食べるふりをして「うわあ、おいしくない」と顔をしかめて話した。その後「食べ物をひとつちょうだい」と子どもに求め、実験者の好みに基づいて、実験者は(子ども自身の好みと欲求とは異なり)ピーマンを欲求していることを正しく理解しているかを測定した[40, 54]。12名の子どもが欲求理解課題を通過したが、母親のMM得点が高いとその子どもは欲求理解に優れるだろうという仮説

を支持する関連は認められなかった($r_{pb} = -.15, ns$)。

次いで、48ヵ月時点(N=31)では、位置誤信念課題を実施した[55]。シマウマが黄色の袋にクッキーを入れて退室し、シマウマがいない間にサルがクッキーを黄色の袋から青色の袋に移し、その後にシマウマが帰宅するストーリーを実演した。誤信念質問として、おやつを食べたいシマウマはクッキーをどちらの袋に探しに行くかを質問した。誤信念課題に通過した子どもは10名であった。高いMM得点を持つ母親の子どもが誤信念理解に優れているだろうと仮説に基づき分析を実施したが、ここでも、そのような関連は認められなかった ($r_{pb} = -.28, ns$)。

子どもの欲求理解や誤信念理解には、母親のMMによる影響は認められないのだろうか。そこで、MM得点の低さは子どもの発達を促進する機能を持たないが、中程度以上のMM得点は促進的機能を持つのではないかという第2の可能性を検討することとした。MM得点に基づき母親を、低群(平均値から1SD以下)、中群(平均値 \pm 1SD内のMM得点)、高群(平均値より1SD以上)に分類したところ、群によって欲求理解、誤信念理解の成績に差があることが確認された。ところがその結果は第2の仮説を支持するものでもなく、MM得点の中位群に属する母親の子どもが、低群のみならず高群の子ども達よりも成績が良いことを示唆するものであった。Figure 3と4にこれらの結果を示す。

9. 縦断研究の結果から

以上、母親の豊かなMMについての縦断研究を紹介してきたが、その成果は主に2つにまとめられるだろう。1つ目は、子どもが乳児期に測定された母親の豊かなMMの個人差は、我が子に対する具体的な養育行動に、乳児期のみならず幼児期まで長期的な影響を持つ様相を示した点である。2点目として、乳児期に測定された母親の豊かなMMは、先行研究が検討してきた4歳という時期よりも早い時期から、感情理解や語彙発達といったより幅広い内容を含む社会的発達を促進することを示した。これらは、乳児を心を持つ一人の人間とみなすことが、養育者が乳児との間で発達早期から心を絡めたやりとりを実践することにつながり、さらにその親子やりとりが、子どもの心理的発達を支えるという、as-if理論に対する一つの実証的知見を示したものと考える。

ただし、母親のMMという態度が、乳児とのやりとりの構築と維持を可能にしているのか、今後はより幅広い行動指標を含めた検討が必要だと考える。特に、心的語彙以外にも含

めた母親の総発話量を検討する必要性、生後9ヵ月以降の親子間の共同注意のスタイルの検討、母親の養育行動の量ではなく質的側面の分析、など今後取り組むべき問題点が残る。また、子ども側の発達指標についても視点を広げる必要があるだろう。本縦断研究では、まずは母親が子どもの心を慮る図式から、やがて子どもも相手の心を理解し始めてやりとりの非対称性が解消されていく発達、すなわち子どもが示す他者理解の発達に重点を置いた。しかしながらFonagyら [14]が指摘するように、乳児が養育者から心という枠組みを与えられ、その扱い方を示されながら育てられる中で、それを如何に内在化し、子ども自身による自己の心的状態の理解、情動制御といった心の整え方をどう発達させていくのかを問うこともまた、重要な研究課題である。

こうした課題、加えて、筆者が単独で実施した縦断研究におけるサンプルと変数の少なさといった限界はあるのだが、次のような意義があったのではないかと考えている。例えばこれまで、母親が家庭内で心的語彙を豊富に使用することが、子どもの感情理解の発達を予測すること報告されているが[24, 50]、母親の心的語彙の使用量になぜ個人差があるのか、という点は十分に検討されてこなかった。本稿では母親の豊かなMMという、乳児に興味や感情、思考などの存在を帰属する傾向の個人差が、子どもへの言語的養育行動の実践を説明する一要因となっている可能性を示した。この知見は同時に、養育者の行動を理解する、あるいは今後の養育行動を予測する際に、養育者が乳児に対して抱いている主観にアプローチすることの有効性を示していると考えられる。養育者が抱く、乳児の心の世界についての主観を積極的に扱うことは、親子やりとり場面で観察される養育行動の理解、親子関係への支援、ペアレンティング教育などの糸口として、大きな可能性を持っているのではないかと考えている。

10. 結びにかえて：豊かさ、適切さ、good enough

最後に、豊富なMMを中程度に持っていた母親の子どもは、欲求理解に優れ、誤信念理解にも優れる傾向が確認された結果について考察し、結びにかえることとしたい。

48ヵ月時の誤信念理解について、Meinsら[33]が測定した母親の適切なMM、すなわち、乳児の心に対する適切な読みとりはそれを予測し、一方、本論で測定した豊かなMMはその説明力を持たなかった。豊富なMMとは、そもそも母親は乳児が心を持っていると思うのか否か、という特徴に着目したものであり、心的帰属の内容面の適切さは敢えて扱わなかった。子どもの誤信念理解に関する結果の相違に基づくと、MMという態度に関する豊

富さと適切さは同じものではないのだと推測される。

それでは、豊富なMMは子どもの発達に対してどのような機能を持っていたのだろうか。本縦断研究において、MM得点を高く持つ母親の子どもは、心的語彙の理解、感情理解(表情命名)、一般語彙の理解が高いことが見出されたが、こうした発達指標を測定する課題において、子どもは心的語彙、一般語彙、表情を理解することを求められた。それらは全て、他者によって表出され、顕在化された心の状態を示すものだと考えられないだろうか。一方、MM得点と線形の関連が認められなかった欲求理解の課題において、子どもは実験者がどちらの食べ物を欲しいと思うかを推測することが求められた。また誤信念課題でも、シマウマがどこにお菓子を探しに行くと思うかを状況に基づき考え、推測する必要があった。これらの課題はいずれも、未だ表出されていない、他者の内なる心の状態を正確に推測することが求められるものであったと言えよう。

こうした課題内容の特徴を考慮すると、母親の豊富なMMは、子どもが他者によって既に顕在化された心を理解する能力を促進する機能を持っていたのではないかと考えられる。高いMM得点を示した母親は、子どもに対する心的語彙の豊富な付与により、発達早期から子どもに対して心というものの存在を示し続けてきた。そして、その豊富なMMは、他者の表情、心的語彙によって顕在化された心の存在の理解という子どもの発達に寄与し得たのではないかと考えられる。しかしながら、母親の豊富なMMは、他者の心の中に何が入っているのか、まだ顕在化されていない他者の心的世界について、他者の視点から内容を正確に推測して理解する能力を高めるものではなかったのだろう。そしておそらく、ある状況下で他者の視点に立ち、その人が何を欲求し、信じ、感じているかという内容を正確に理解する能力の促進には、Meins[33]やOpemheim[36]などが検討してきたような、乳児の心に対する養育者の主観の適切性という軸が鍵になっているのではないかと考えられる。母親が乳児の視点から状況を捉え、文脈に合致した思考や感情の有り様を乳児に読み込み言語化することが、特定の状況と結びついた自己の心的状態の理解、およびそれに基づいた、ある文脈に置かれた他者の心の推測を可能にしていく、という道筋が予想される[43]。

ここで推察したような機序の実際を明らかにしていくことが今後の大きな課題であるが、欲求や信念理解の発達について、豊富なMM得点を高く持つ母親の子どもが優れず、中程度の得点を持つ母親の子どもが優れる傾向にある、という今回の結果はどのように解釈できるだろうか。一つには、豊富なMM得点における中程度の高さが、結果的に最も内容とし

ての適切性を備えていた、という可能性が挙げられるだろう。例えばFonagyら[14]は臨床的知見から、乳児への心的帰属に関して過剰性や偏りを含む過剰なMM (hyper mind-mindedness)の存在を指摘し、これが子どもに否定的影響を及ぼす可能性を危惧している。また、BernierとDozier[5]は、母親が子どもの心理的な側面について多く語ることは、子どもの安定型アタッチメントの発達と負の関係にあるという知見を報告した。そして、少なくとも2-3歳未満の子どもに対して母親が過分に心的世界を想定することは、発達を阻害する要因になり得るとして警鐘を鳴らしている。アタッチメントの発達についてのこうした議論が、メンタライジング能力の発達についても同様にあてはまるのかは、慎重に検討する必要があるが、筆者が測定したMM得点の高さに、過剰さ、子どもの視点とのずれ、あるいは子どもの視点を考慮していない母親の心的状態の投影が含まれていた可能性が考えられる。そして、MM得点の中位群の母親には相対的に子どもの視点とのずれが少なかったために、文脈と対応した心的状態を理解する足場を子どもに提供しやすかったのかもしれない。

母親がMM得点を高く持つことが子どもの発達に否定的影響を持っていたのか、あるいは中程度の高さのみが持つ促進的機能があったのか、現段階での考察は推測にとどまり、今後、MMの豊かさと適切性の関連を含めて直接的に検討していくという最大の課題が残っている。ただし今回の結果は、good enough[56]の表現に込められるように、母親の特徴が強すぎも弱すぎもせず適度であること、ほぼ良い状態であることの積極的意味を示した知見の一つであると考えられる。そして、子どもの発達を支える社会的環境について再考を促す結果でもあるだろう。子どもの発達にとって、養育者がある特徴を高く持っていればいるほど良い、あるいは養育者が何かをすればするほど良い、という図式以外のモデルを持って検討することの必要性が示唆されたのではないだろうか。本縦断研究について報告した赤ちゃん学会において遠藤[12]はless is lessということが、安易にmore is moreにすり替えられてしまうことの危険性を強く指摘された。本研究の結果に照らすと、MM得点が低い母親の子どもには確かに、感情理解や語彙発達、欲求や信念理解の成績が優れないことは認められた。しかしそのことをもって、MM得点が高ければ高いほど子どもの発達が全て促進されるという訳ではないことは、上に示してきた通りである。希薄さについては補う必要があるが、養育者が何かをたくさんすること、あるいはそのように介入することは、必ずしも子どもの社会的発達にとって最適ではない、ということに留意すべきであろう。長い縦断研究の末、MM中位群に関する予想外の結果に頭を抱えていた筆者も

結局，more is moreの枠組みに留まっていたということである。こうした気づきをもたらしてくださった，研究協力者であるご家族の皆様へ感謝を込めて，本報告を結ぶこととした。

謝辞

長期に亘る縦断研究にご協力くださいました，お子様，ご家族の皆様へ感謝申し上げます。また，本稿で紹介した筆者による研究は，日本学術振興会特別研究員奨励費04J01044，科学研究費補助金 若手研究(スタートアップ) 20830137による助成を受けて行われました。

引用文献

- [1] Adamson, L.B. : Communication development during infancy.(Westview Press,1995). (大藪 泰・田中みどり訳. 「乳児のコミュニケーション発達」,川島書店,1999)
- [2] Adamson, L.B.,Bakeman,R.,Smith,C.B.,&Walters,A.S. :Adults' interpretation of infants' acts. *Developmental Psychology*, 23,383-387. (1987).
- [3] Ainsworth, M.D.S.,Blehar, M.C.,Waters, E.,&Wall, S.: Patterns of attachment :A psychological study of the strange situation. (Lawrence Erlbaum Associates. Hillsdale,NJ,1978).
- [4] Beaumont, S. L., & Bloom, K. : Adults' attributions of intentionality to vocalizing infants. *First Language*, 13(38), 235-247. (1993).
- [5] Bernier, A.,& Dozier, M.: Bridging the attachment transmission gap: The role of maternal mind-mindedness. *International Journal of Behavioral Development*, Vol 27(4),355-365(2003).
- [6] Bowlby, J.: Attachment and Loss. Vol.1. Attachment. (New York: Basic Books,1969/1982).
- [7] Brand, Rebecca J., Dare A. Baldwin, and Leslie A. Ashburn.: Evidence for 'motionese': modifications in mothers' infant - directed action.*Developmental Science* 5(1), 72-83. (2002).
- [8] Brosch, T.,Sander, D.,&Scherer, K. R. :That baby caught my eye... Attention capture by infant faces. *Emotion*. 7, 685-689. (2007).
- [9] Brown, J.R., & Dunn, J. :You can cry mam: The social and developmental implications of talk about internal states. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 237-256. (1991).
- [10] Bruner, J. : Child's Talk: Learning to use language. (Norton, New York,1983).
- [11] Emde, R. N., Gaensbauer, T. J., & Harmon, R. J.: Emotional expression in infancy: Abiobehavioral study. *Psychological Issues: Monograph Series*, No. 37. (1976)
- [12] 遠藤利彦.: 赤ちゃんと他者の関わりを科学する -心理学・認知科学・構成論・リハビリテーションの視点から-,第13回 学術集会ラウンドテーブル,指定討論.(2013)
- [13] Fernald,A., Taeschner,T., Dunn,J., Papousek, M.,de Boysson-Bardies,B., and Fukui,I. : A cross-language study of prosodic modifications in mothers' and fathers' speech to preverbal infants. *Journal of Child Language*, 16, 477-501. (1989).
- [14] Fonagy, P.,Gergely, G.,& Target, M. : The parent-infant dyad and the construction of the

- subjective self. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*,48,288-328. (2007).
- [15] Fonagy, P., & Target, M. : Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*,9,679-700. (1997).
- [16] Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, A.: The relationship between belief-desire reasoning and positive measure of attachment security(SAT). *British Journal of Developmental Psychology*,15,51-61. (1997).
- [17] Futo, J., Batki, A., Koos, O., Fonagy, P., & Gergely, G.: Early social-interactive determinants of later representational and affect-regulative competence in pretend play. Paper presented at the 14th Biennial International Conference on Infant Studies, Chicago. (2004).
- [18] Glocker, M. L., Langleben, D. D., Ruparel, K., Loughhead, J. W., Gur, R. C., & Sachser, N.: Baby schema in infant faces induces cuteness perception and motivation for caretaking in adults. *Ethology*, 115(3), 257-263. (2009).
- [19] Goren, C. C., Sarty, M., & Wu, P. Y. : Visual following and pattern discrimination of face-like stimuli by newborn infants. *Pediatrics*, 56(4), 544-549. (1975).
- [20] Harris, P. L.: From simulation to folk psychology: the case for development. *Mind & Language*,7,120-144. (1992).
- [21] Harris, P. L.: Individual differences in understanding emotion: The role of attachment status and psychological discourse. *Attachment and Human Development*, 1, 307–324. (1999).
- [22] Hoffman, M. L.: Empathy, role-taking, guilt, and development of altruistic motives. In T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior: theory, research, and social issues*. (Rinehart, & Winston. New York,1976).
- [23] Kaye, K. : *The mental and social life of babies: How parents create persona*. (University of Chicago Press. Chicago,1982). (鯨岡 峻・鯨岡和子訳「親はどのようにして赤ちゃんをひとり人間にするのか」 ミネルヴァ書房, 1993).
- [24] Laible, D.: Mother-child discourse in two contexts: Links with child temperament, attachment security, and socioemotional competence. *Developmental Psychology*, 40, 979-992. (2004).
- [25] Laible, D.J. & Thompson, R.A.: Attachment and emotional understanding in preschool children. *Developmental Psychology*, 5, 1038-1045. (1998).
- [26] Leslie, A.M. : Tom and Toby: core architecture and domain specificity. In L.A.Hirschfeld & S.A.Gelman (Eds.) *Mapping the mind: domain specificity in cognition and culture*.

- (Cambridge University Press. New York. 1994).
- [27] Lewis, M. Self-conscious emotions. *Handbook of emotions*, 2, 623-636. (2000).
- [28] Lieven, E. V. M. : Crosslinguistic and crosscultural aspects of language addressed to children. In C. Gallaway & B. J. Richards (Eds.), *Input and interaction in language acquisition*. (Cambridge University Press. Cambridge: 1994).
- [29] 松永あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子. :乳幼児期における人の内的状態の理解に関する発達の研究－内的状態を表すことばの分析を通して. *山形大学紀要（教育科学）*, 11, 35-55. (1996).
- [30] Meins, E.: *Security of attachment and the social development of cognition*. (Psychology Press. East Sussex, UK, 1997).
- [31] Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., & Tuckey, M. : Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental processes predict security of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 42, 637-648. (2001).
- [32] Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-Carter, D. : Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development*, 7, 1-24. (1998).
- [33] Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. : Pathways to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*. 74, 1194-1211. (2003).
- [34] Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M.: Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 1715-1726. (2002).
- [35] Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. : Mothers' insightfulness regarding their children's internal world: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant Mental Health Journal*, 23, 593-605. (2002).
- [36] Oppenheim, D. , Koren-Karie, N., Etzin-Carasso, A., & Sagi, A. : Maternal insightfulness but not infant attachment predicts 4 year old's theory of mind. Paper presented at biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Atlanta, Georgia. (2005).
- [37] Parsons, C. E., Young, K. S., Kumari, N., Stein, A., & Kringelbach, M. L. : The motivational salience of infant faces is similar for men and women. *PLoS one*, 6(5), e20632. (2011).

- [38] Perner, J.: Understanding the representational mind. (MIT Press. Cambridge,MA,1991).
- [39] Pons, F., Harris, P. L., & de Rosnay, M. :Emotion comprehension between 3 and 11 years: Developmental periods and hierarchical organization. *European Journal of Developmental Psychology*, 1(2), 127-152. (2004).
- [40] Repacholi, B. M., & Gopnik, A.: Early reasoning about desires: Evidence from 14- and 18-month-olds. *Developmental Psychology*, 33, 12-21. (1997).
- [41] Reznick, J. :Influences on maternal attribution of infant intentionality. In P.D.Zelazo, J.W.Astington, & D.R.Olson (Eds.), *Developing theories of intention: Social understanding and self-control*. (Lawrence Erlbaum Associates. Mahwah,NJ, 1999).
- [42] Sagi, A., & Hoffman, M. L. : Empathic distress in the newborn. *Developmental Psychology*, 12(2), 175. (1976).
- [43] Sharp, C.,& Fonagy, C. :The parent's capacity to treat the child as a psychological agent: Constructs, measures and implications for developmental psychopathology. *Social Development*,17, 737 – 754. (2008).
- [44] 篠原郁子.: < mind-mindedness > 個人差の規定因に関する探索的研究. 京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要 教育方法の探求, 7, 48-55. (2004).
- [45] 篠原郁子.: 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発 – 母子相互作用との関連を含めて –. *心理学研究*, 77(3), 244-252. (2006).
- [46] 篠原郁子: 母親の mind-mindedness と 18 ヶ月児の心の理解能力の関連 – 共同注意行動および内的状態語の発達との検討 –. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 260-271. (2007).
- [47] 篠原郁子 : 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達: 生後 5 年間の縦断調査. *発達心理学研究*, 22(3), 240-250. (2011)
- [48] 篠原郁子: 心を紡ぐ心 親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達. (ナカニシヤ出版, 京都 (2013).
- [49] Steele, H., Steele, M., Croft, C., & Fonagy, P.: Infant-mother attachment at one year predicts children's understanding of mixed emotions at six-years. *Social Development*, 8, 161–178. (1999).
- [50] Taumoepeau, M., & Ruffman, T. : Mother and infant talk about mental states relates to desire language and emotion understanding. *Child Development*, 77, 465–481. (2006).

- [51] Thompson - Booth, C., Viding, E., Mayes, L. C., Rutherford, H. J., Hodsoll, S., & McCrory, E. J. : Here's looking at you, kid: attention to infant emotional faces in mothers and non - mothers. *Developmental Science*. (2013).
- [52] Vedeler, D. : Infant intentionality and the attribution of intentions to infants. *Human Development*, 30, 1-17. (1987).
- [53] Vygotsky, L.S. *Mind in society: The development of higher psychological process*. (Harvard University Press. Cambridge, MA,1978).
- [54] Wellman, H. M. & Liu, D.: Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development*, 75, 523-541. (2004).
- [55] Wimmer ,H. & Perner, J. : Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception.*Cognition*,13,103-128. (1983).
- [56] Winnicott, D. W.: *Playing and reality*. (Tavistock Publications, 1971). (橋本雅雄訳「遊ぶことと現実」 岩崎学術出版社 ,1979).

Table 1 各観察時期における母子自由遊び場面10分間において
母親が子どもの心的状態に言及した回数 (平均とSD)

	6ヵ月時	9ヵ月時	18ヵ月時	24ヵ月時	36ヵ月時
平均回数	10.71	10.55	8.94	7.28	4.82
(SD)	7.69	8.16	6.91	4.73	3.56

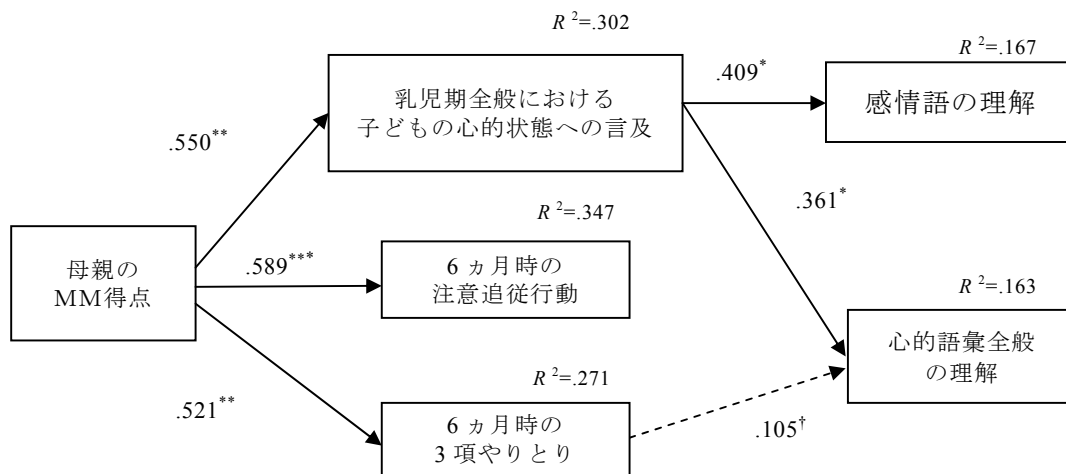


Figure 1

生後18ヵ月時の発達に関する母親のMMからの影響プロセス

($\chi^2(7)=6.592, p=.473, NFI=.952, CFI=1.000, RAMSEA=.000$)

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

篠原(2013)より転載

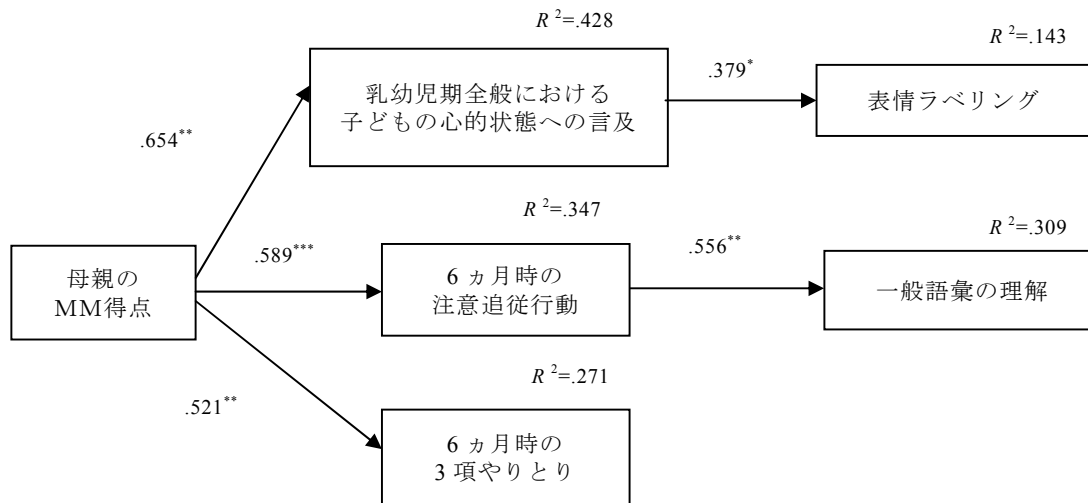


Figure 2

生後48ヶ月時の発達に関する母親のMMからの影響プロセス

($\chi^2(8)=7.250, p=.510, NFI=.913, CFI=1.000, RAMSEA=.000$)

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

篠原(2013)より転載

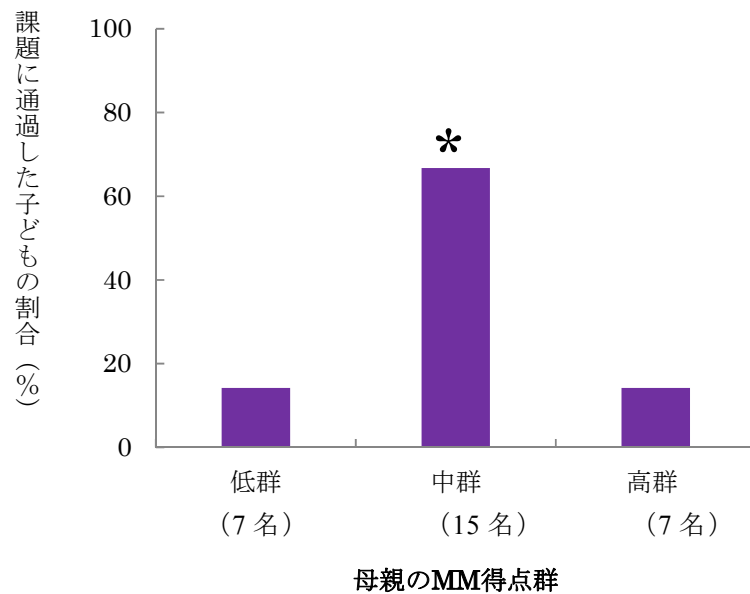


Figure 3

母親のMM得点群別 36ヵ月時の子どもの欲求理解課題の通過率

* $p < .05$

注1：MM得点群によって、子どもの成績に有意差があり($\chi^2(2) = 8.191$ $p < .05$),

MM得点中群では通過した子どもの人数の割合が有意に多かった ($p < .05$)。

注2：MM得点群は生後6ヵ月時の測定結果に基づき作成したが、調査時期によって参加した子どもの人数に違いがあるため、Figure 3とFigure4では各群の人数が異なる。

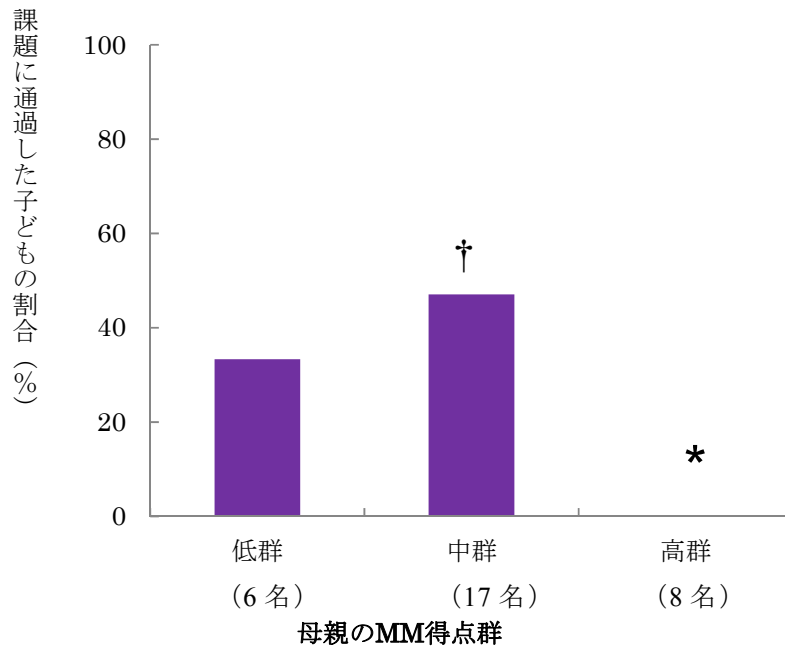


Figure 4

母親のMM得点群別 48ヵ月時の子どもの誤信念課題の通過率

† $p < .10$ * $p < .05$

注: MM得点群によって, 子どもの成績に有意差があった ($X^2(2) = 5.512, p = .049$)。

MM得点中群では通過した子どもの人数の割合が高い傾向があり ($p < .10$), 高群には通過した子どもの割合が有意に低かった ($p < .05$)。